シンポジウム・口承文芸の未来

ストーリーテリング

藤野時代

「ストーリーテリング」という語について

「語りの世界・23号」から引くと〈もとは物語りを口承で語ることを指す。一八九〇年代にカナダとアメリカの図書館児童室で床に座ってくつろいだ子どもたちに、図書館員が本に書かれた昔話や創作文学を口頭で語り聞かせたところから、近代のストーリーテリングが始まった。一九六〇年以後この用語を片仮名で用いる場合は「お話会でお話を語る」ことと同義で使用されることが多い〉とあるが、ここでは聞き手の範囲を子どもに限らず大人にまで拡大し「語り」という語を使用する。

私が「ストーリーテリング＝語り」に出会ったのは、川口市立公民館開催の「お話教室」であった。（あとで知ったことであるが、この講座は東京子ども図書館主催のお話講習会修了生の一人が企画を持ち込み開講に至ったお話ボランテア養成講座だった。）

「受講生が少ないから」と公民館長に誘われ、講座名から「話し方教室」と思い気軽に応じたのが、そもそもの始まりであった。この偶然の語りとの出会いがなかったならば、私は昔話とか語りなどとは全く無縁の暮らしをしていたにちがいない。

まっ先に結論を述べてしまうようだが、生の語りと出会い、その語り手に触発されるか否かによって、次なる語り手への道は決定づけられるといってもよさそうである。

この講座の講師陣がまた児童図書館界の大御所であり第一級の現代の語り手でもある小河内芳子であり、「語り手たちの会」代表の櫻井美紀などであったから、受講生の多くは、たちまちその語りに魅了され、その場で語り手を志願した者が続出した。

初心者なら誰でもするように、そこで勧められるままに購入した手引き書・指導書などと首っ引きで、課題の語りの練習をし始めたのだった。[1]

週一回、語りの実習も含めた全八回の講座修了日には、有志十数名で「お話（語り）の会」を発足させていた。即、社会教育団体として登録もし、地域文庫活動の月例会で語りだしていた。

数ヶ月後からは小学校、図書館、学童保育、団地集会所、幼稚園や保育所その他福祉施設などからの要望に応えて未熟を自覚しながらも語ってきた。

このような経過からも、すぐれた語り手の語りによる動機づけが次なる語り手誕生に深く関わっていくと考えている。語りの継承は、すぐれた語り手との出会いの場から出発するのであれば、現在の語りの生きた姿をまず多くの人に知ってもらわなくてはじまらない。

優れた伝承の語り手は、優れた聞き耳をもった人たちと出会い、語り重ねる機会を持てたからこそ、その原話は高く評価されている。

私たち現代の語り手もそれに倣い、進んで聞く語る場に連なり技の向上に励まなくてはなるまい。

今現に、肉声の語りを一番多く聞いて、あるいは聞かされているのは「お話会」に集まってくる子どもたちと、語り手たちの子どもであり、他ならぬ語り手たちなのだから、ここに継承に関わる問題があるはずである。

現代の語り手たちに突きつけられている疑問や問題点の中からいくつか取り上げてみたい。

一、家庭内継承は期待できるのか

伝承体験を経ないテキストからの語りを聞いて、はたして次なる語り手は育つのか、という問題については、私は悲観してはいない。二十年足らずのささやかな経験からでさえ、現代の語り手たちの語りの練習に立ち会った子どもたちに期待を寄せていいと思う。

かつて行われていた子や孫への伝統的口移しの方法は今も、多様で多彩な新しい語りの場と、そのあたらしい形式へ創造的に転用・再生されながら先導役を果たしているともいえよう。

公的語りの場で、語り手が複数組んで語っているが、母親でもある語り手たちの多くは家庭内でまず手始めに我が子に語り聞かせながら語りを仕上げていく。家庭という気のおけないリハーサルの場で、それぞれ自分にあった方法で、仮死状態の文字テキストから口語りへと再生させながら徐々に自分の語りへと練り上げていく。そうした語りの産みの苦しみの現場を目撃し、聞いて育つ子どもたちの中には、繰り返された母の言葉の隅々までを残らず聴き耳に蓄えているものも少なくはないはずである。次ぎの事例などからも、子育て中の語り手にこそ大きな期待が寄せられるというものである。

〔小学生の例から〕

①三年生・女児の例

「三枚のお札」の場合

四、五才ごろから毎晩のように、テキスト通り語る母の練習を聞かされ、母より先にテキストを覚えてしまい、間違いを訂正したりしているうちに、ごく自然に自分の生活体験なども織り込んで語れるようになっていて、友だちに語って聞かせていたという。数年後、たまたま大人の語りの場に一人混じっていて、そこで求められるままに臆せず語った。母のテキストにはなかった和尚の科白＜小僧、お茶もってこい＞などと父親の影もちらつく語りを披露した。

②三年生・男児の例

今昔物語からの作品「鬼ぞろぞろ」／偕成社

例①と同様、母の語り口を諳んじていたが、覚えたままを語るのではなく換骨奪胎新しい物語りにつくり変えながら語った。（語り手たちの会発行／語りの文化シリーズ・7「津軽の詩」＜めだかをのんだ男＞参照）

③六年生・男児の例

「ドラクエもナルニアも好きだよ」（「語りの世界」9号から）

兄が「テテポッポ」を語って中学入学を果たしたことから、自分も語りで受験するつもりだとインタビューに応えている。豊かな語り、読書環境が創造力を刺激したようで、四年生で「火曜日は空をとべる」に始まり、これまで三話のファンタジーを書き上げている。

こうした事例からも、疑似体験ながら物語りの主人公たちと共に味わう人生の苦楽は聞き手の想像力を駆り立て、豊かな感性は日常的な温かい対人関係が育て、やがては素直な表現活動を促す結果に結びついたと考えられる。

聞き手の琴線にふれる語りであれば、その語りは丸ごと記憶の深いところに蓄えられ、時の波にかき消されることなく、突然の要請にも応えて、練習なしでも語ることができる。伝承の語り手に備わっていたこうした継承のありようは決して途絶するものではないと考えているのだが……。追跡調査を経たわけではないので自信はないが、期待をこめてしぶとく語り聞かせていくことが、継承には何よりも肝心だと思う。

テキスト丸抱えのなぞり語りに専念するだけの語り手には望むべくもないことだが、大人には思いつかないような斬新な発想を組み込んでのびのび語れる子どもたちの語り態度にも次ぎなる語り手予備軍たる資質は充分備わっていると考える。手前味噌ながら、語りの場の広がりを願って語り活動を展開してきた語り手たちの会では、会発足当初から子どもの語り手を歓迎し「聞き手から語り手への循環」も意識してきたところである。

二、集団で聞かされるお話の時間だけで、次の語り手は育つのか

重ねて述べることになるが、何気ない地域での語り活動に触発された語り手志望者と共に学びあっていくことも現代の語り手の大事な仕事だと考えている。

①「お話のおばさん」として……乳幼児から小中学生などへ語る

②ボランテアの「語り手」として……グループ員や近隣の人々、子育て中の母親層へ語る、福祉施設などで語る

③その他……家庭での語りと読み聞かせなどにかかわる語りのボランテア養成などにも直接関わって語る

地域で日常的に〈語る・聞く〉ことから得られる感動と共感はいつの日か新たな語り手を誕生させるにちがいない。互いの経験交流により、聞き手の心に響く語りを届けるための努力なしには次なる語り手は生まれも育ちもしない。そして未熟を自覚するがゆえに語り手たちは旺盛な学習意欲を持ち続ける。現行の語り関連の学習活動の盛況ぶりはその何よりの証拠であろう。

語り手たちの会主催の「語りのセミナー21」[2]開講の趣旨には、「語りに新しい風を吹き込むために、語りの伝統を学び、こころと技をみがくセミナーです。講義、実習、実演、ワークショップなどを通して、子どもから大人までの魂をゆるがし、心身を活き活きとさせる語りを生み出すことを目指します。このセミナーは一九九七年を初年度としてスタートしました。十年間連続開講の予定で、四年目を迎えました。」とあるが、一年間も待機して受講するものさえある。（他にセミナー修了生を主たる対象とする「語りの研究セミナー」一泊二日／年四回、一期三年、も開講中）

このほかにも、現代の語り手たちの多くは、伝承の語り経験を持たないという負い目からなのか、都市近郊を軸にした大小さまざまな語り関連の講座が開かれている。

全国規模で展開中の講座には、地域の語り手や司書を対象にした「昔話大学」（小澤俊夫＋実行委員）が一泊二日、全六回／三年修了

と、その後の語るための再話演習「再話コース」もある。こちらは一泊二日、全四回／二年修了＋再話作品集発行を含む。

ほかにも「御伽草子」を中心にしたセミナー（野村純一＋世話人）や集中講座を開講する語り手グループもある。

三、新しい波

今日の多様な語りの場の広がりには、つい先頃までの「子ども向けの一方的語り聞かせ」だけでは対応できなくなってきたという、現実がある。そこで、内外の語り手との経験交流や一般市民への語りの宣伝も兼ねたイベントも催されている。

語りのイベント例を紹介する。（語り手として参加した主なもの）

「語りのつどい」[3] 川口市内の語りグループと市立図書館五館後援

「全日本語りの祭り」 全国各地で隔年開催。秩父市で第一回開催後隔年開催中。平成十二年（第五回）桐生市開催。全日本語りネットワーク主催。

印象的だった第三回の山口県徳山市会場で披露された本邦初の語りのスタイル「タンデム・ストーリテリング」というのは、語り手二人の掛け合い語り、役割分担語りとでもよべそうな楽しいものだった。民俗博士号を持つアメリカの語り手、M・マクドナルドの英語の語りを同時進行で日本語で語り変えた末吉正子。二人とも大ホールの舞台狭しと駆けずり回っての熱演に会場からの拍手の嵐。多様で多彩な語りへ開眼。（詳細「語りの世界」24号）

「テラブレーション・ジャパン」[4] 毎年十一月・各地での大小自発的、自由参加の語りの会。

同事務局発行の報告記録集にはプログラム内容、参加者数、時間、場所など細かい情報が満載されていて、生の語りの現場を知る得難い参考資料。（全日本語りネットワーク・テラブレーション事務局発行）

結局私たち新しい語り手は伝統の語りに学びながらも、語り環境の変化に対応し現代に機能する新しい語りを試みる必要があるということだ。内輪の少人数に語ってきた素人の語り手も、多様な語りの場に立たされるようになると、素人の立場だけでは語り手の仕事（聞き手を満足させる）を果たせなくなってきた。そこで経験豊富な語り手たちの中には演劇的要素や伝統話芸、新しい演芸その他の芸術分野からも多くを学ぶ必要があるとして「舞台での語り」などを試みる人も出てきた。これは玄人の技、芸に学び、聞き手を、魂を魅了する語りを求めての活動の一環であり、新しい語り手すべてが玄人である必要を求め押しつけるものではないはずだ。

何はともあれ、伝承の語り手からのアピールメッセージ「もっと面白く、いいもの」を受けて、私たちは日常的に語り続け、その語りの場から学び「いつでも、どこでも、誰にでも語れる技」と「何からでも自分の語りを生み出せる力」を得たいものである。

「継承」を意識するあまり目前の聞き手を無視した押しつけ語りに走らないように互いに戒めあい、楽しみを分かち合いながら、伝承の語り手と研究者、そして何よりも、目の前の聞き手に学び、助けられながら、[5]語り続けることで「継承」[6]の一端を担いたいと思う。

最後に、各地への採訪や来日の外国のストーリーテラーたちとの

交流、海外での語り関連の体験報告[7]、学者・研究者の指導や会誌への寄稿[8]などは大きな刺激となり、語り手を支え励ましていることを、この場をお借りして感謝申しあげます。

〔注〕

(1) ユーラリー・S・ロス『ストリーテリングについて』子ども文庫の会（山本まつよ訳）、松岡享子著『たのしいお話シリーズ』他、東京子ども図書館、ルース・ソーヤー『ストリーテラーへの道』日本図書館協会（間崎ルリ子訳）、その他、内外の「昔話集」多数。

(2)「語りのセミナー21」の年間テーマ（二〇〇〇～二〇〇一年）

(1)は午後1時30分～3時10分、(2)は3時30分～4時50分

☆は、語り手たち相互の交流と研鑽の場である「千話一夜」（午後6時～8時30分）のある日

主なテキスト「語り　豊饒の世界へ」／萌文社使用

第1回（1月29日）(1)語りとは何か　多様な語り（片岡輝）
(2)お話会（スタッフ一同）

第2回（2月19日）(1)語りの歴史①（櫻井美紀）
☆　(2)おはなしとあそぼう（末吉正子）

第3回（3月18日）(1)心と身体を自由に（遠藤栄蔵）
(2)語りとは何か②なぜ語るのか（片岡輝）

第4回（4月15日）(1)(2)わらべ唄・手遊び・ことば遊び（伊知地晃子・藤野時代・曲田晴美）
☆

第5回（5月20日）(1)伝承の語りの世界（大島広志）
(2)語りの現場から（藤野時代）

第6回（6月17日）(1)語りの歴史②（櫻井美紀）
(2)ワークショップ・イメージ訓練（同前）
☆

第7回（7月15日）(1)発声訓練（富塚研二）
(2)語りを演出する①（片岡輝）

第8回（8月26日）(1)ワークショップ・感情表現（末吉正子）
☆　(2)ワークショップ・身体表現（同前）

第9回（9月16日）(1)公開セミナー「私を語らせるもの」
(2)語りの世界を広げる（手袋人形を使って）（共に尾松純子）

第10回（10月21日）(1)ワークショップ・自分を語る（櫻井美紀）
☆　(2)語り（三浦克子）

第11回（11月18日）語りの輪に繋がって・「セミナーテラブレーション」参加

第12回（12月16日）全員討議「私にとって語りとは」（片岡輝・櫻井美紀）

第13回（1月20日）(1)原話から再話へ①昔話の構造と機能（大島広志）(2)語り（佐島信子）

第14回（2月17日）(1)公開セミナー「グリム童話の面白さ」
☆　(2)グリムの語り（共に池田香代子、会員二人）

第15回（3月17日）(1)原話から再話へ②（大島広志）
(2)語り手の再話（藤野時代）

第16回（4月21日）(1)原話から再話へ③語りを創る（櫻井美紀）
☆　(2)自作のショートショート中間発表（同前）

第17回（5月19日）(1)子どもと絵とコトバ（堀田穣）

(2)語り（寺内重夫）
第18回（6月16日）(1)語ってみよう①（片岡輝）
☆　(2)自作のショートショート発表（同前）
第19回（7月21日）(1)(2)語ってみよう②もしも視点が変わったら？（末吉正子）
第20回（8月25日）(1)語り口の研究　ストーリーテラーの語り口
☆　とは？（櫻井美紀）(2)語りを演出する②（片岡輝）
第21回（9月22日）(1)(2)語り方研究①自分の語り・演目についての質疑応答（スタッフ一同）
第22回（10月20日）(1)(2)語り方研究②自分の語り・演目についての質疑応答（スタッフ一同）
第23回（11月17日）発表会・セミナーテラブレーション
第24回（12月15日）公開セミナー「終了記念講演」&終了式（片岡輝・櫻井美紀）

(3) 一九九九年・第五回のプログラム（一部紹介）

【スタジオ3（四〇名）】
①おはなしと折り紙であそぼう（10時30分～11時）(1)いいこってどんなこ？（谷川）(2)〔絵本〕うさぎのダンス（谷川）折り紙（千葉）
②幼児（11時20分～12時）(1)ねずみのすもう（木村）(2)こぶとり爺（小貫）(3)〔パネルシアター〕ねずみくんのチョッキ（佐仲）(4)〔大型絵本〕そらいろのたね（宮原あ）
③幼児（13時～13時40分）(1)とりのみじい（雲井）(2)だめといわれてひっこむな（堀井）(3)〔エプロンシアター〕かえりみち（三明）(4)〔パネルシアター〕うさぎどんときつねどん（国重）
④幼児（14時～14時40分）(1)世界でいちばんきれいな声（中野）(2)ついでにペロリ（甲村）(3)〔ペープサート〕はらぺこあおむし（林田、関戸）(4)〈指人形〉ねずみの嫁入り（甲村、関戸）

【スタジオ2（六〇名）】
⑤小学生から大人まで（11時30分～12時）(1)アナンシの帽子ふりおどり（池田）(2)ネギをうえた人（武井）(3)雨のち晴（山縣）(4)さっちゃんのまほうのて（高島）―休憩―(5)三者の死出の旅（中村）(6)つる女房（宮原世）(7)猿と蛙の寄合田（清水享）(8)青いハスの花（清水加）
⑥小学生むき（13時～13時45分）(1)三枚のお札（林）(2)くつやのかけ（西）(3)ホットケーキ（新井）(4)のみはくすり（佐藤）(5)ぼくが密林―きれいな豹になった話（栗山）
⑦小学生むき（14時～14時45分）(1)ならなしとり（能登）(2)くわずにょうぼう（安藤）(3)おてがみ（藤井英）(4)きんのすきな王様（国重）(5)「詩とことばあそび」（澤村）
⑧詩・わらべうた・手あそび（15時～16時半）　自由参加

(4) テラブレーションとは？「テリング」と「セレブレーション」を合わて「テラブレーション」と造語した米人・J・G・ピンカートン氏の提唱する「語りのまつり」。毎年感謝祭の前週末に一斉に行う大規模なもの。米国の語り手たちの全国組織であるMSMAが主催し世界中に呼びかけている。一九九五年から「語り手たちの会」が日本全国に呼びかけ始まる。

(5) 個人的な伝承の語り手を訪ねる旅や「民話と文学の会」など

に参加。
(6) カナダ・トロント博物館司書のジャック・ハワード（男性）、同じカナダのプロの語り手キャシー・M（女性）。
(7)「イギリスの語りの祭り」（「語りの世界」29号）報告者　光藤由美子
その他「私が見てきたイギリスのストーリテリング」
「ハワイのストーリーテラー・カレンさんと交流して」など。
(8)「ドイツでの語りの新事情（ヨーロッパメルヒェン協会のこと）」（「語りの世界」16号）高野享子
「南フランス・ピレネー山麓の語り」（同17号）　新倉朗子
「グリムに出会ったイタリアの旅」（同18号）　剣持弘子
（ふじの・ときよ／語り手たちの会）

シンポジウム・口承文芸の未来

作業歌

岩井正浩

一、はじめに

京都の祇園祭宵宮の南観音山では〈ろうそく売り〉が歌われていた。

あすはでません、今晩かぎり、つけてお帰りなされましょう、
ろうそく一本どうですか～

女の子たちが2音旋律で歌うこの歌はわらべ歌である。しかし商売をしているところからみると作業歌でもある。また《五木の子守歌》などのように子守奉公人としての子どもが歌う子守歌も日本には存在していた。

今日、作業歌が衰退・断絶したといわれる。それは作業歌が歌われた当時の作業形態・方法・手段に伴って歌われていたことからみるといたしかたない。衰退の内容も作業歌としてであって、娯楽用・芸術歌曲として変容して継承されている民謡もある。